

徳山市大津島近江の七人墓

清 木 素

数年前大津島の民俗調査に出かけ、大津島の北端近江地区で由緒不明の墓石のあることを石田昇氏から聞いた。案内された地点は、現在K R Yの放送塔のある下方で、茅などの草が生い茂り、やっとその墓を発見出来た。正面の「淡涼圓清信士」は読みとれた。横裏三面に銘文のあることに気付き、早速拓本に取り掛った。彫りがうすく判読が難しいので、一応持ち帰ることにした。

この地区は、明治中期には福川村に属したこともあり、舟便も福川から出ており、昔から交際のあった地区である。両方の地区に七人墓の伝説はあったようだが、その場所については不明であった。近江地区も一般の住民の墓地とは位置が違い、あいまいのまま過ぎてきた。

拓本の解説に取り掛ったが、非常にうすい彫りと年数の経過のため満足に読みにくい箇所があった。

判読して一応明らかになった事は、戒名と河野助之進一通

という西肥前島原の人が元禄六年六月、江戸における勤役のため先発して、小倉港から周防灘に出て大暴風雨にあった。その時のすさまじい情景を「洪波は天輪をはね、湧浪は地軸を転じ、すさまじい風雨は砂礫を飛ばし、飄風は大木を抜き、海面は一天にわかにかき曇り、西や東の方角も辨することができない。帆柱は折れ、楫はくだけなすところを知らない」と述べている。また前にも進めず後にしりぞくこともできないで、一通は同僚に勧め、六人とともに意を決して崖にっこうとしたが、遂に身を起すことも出来ないで海底の藻くずと消え果ててしまったのである。

この計を聞いて家人たちは悲慟その極に達した。その母と娘はその所が分らなくなるのを恐れて其の姓名を略記して墓石を建てたとある。

最後の銘にはその当時暴風雨のすさまじさを記し、縁故者や島の人々の手厚い供養によって、その霊魂はふるさと肥陽

に清遊していることだろうと結んである。

以上のことが分ってそのまま三年余がすぎた。

たまたま徳山市史料上巻第五篇藩史巻之六異変之部

(七二三頁)に「元禄六年癸酉六月廿五日大風雨破船死人數不知

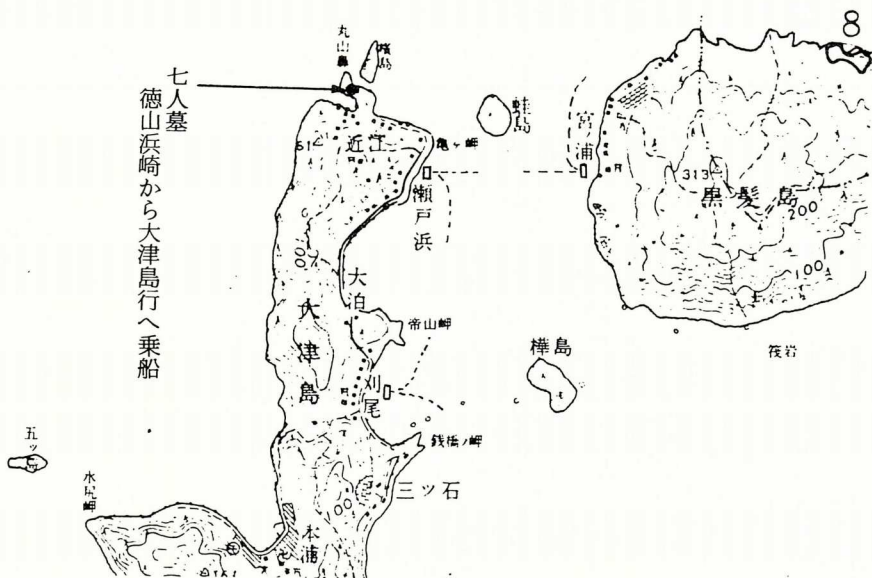
※御城米破船拾島ニテ(越前之六分)大津島ニテ(越後之六分)」とあるのを知り、この墓石との関係について急に考察してみた。

墓碑銘に記入された年月日も一致するし、島原市に問い合せたところ、その郷土史家野村義文(島原市収入役)の調査によると、河野助之進一通は河野久左衛門昌通の養子であることが分った。

河野久左衛門は一五〇石の砲術師範であった。その子孫は宇都宮に去って跡が絶えている。久左衛門、助之進とも二代にわたり、松平忠房、忠雄に仕えたことは考えられるという。また、島原半島史の元禄時代の史料を見ると、「元禄六年(一六九三)六月二十五日暴風雨家の倒壊多し城樓破壊す」とあり、この台風の進路が周防灘に向ったことも容易に考えられる。

今後島原市の方で関係文献が判明してくればよいと願っている。

さきに近江地区に於ては、昭和五十九年六月二十四日には支所長はじめ島民が集り七人墓の霊安らかにと供養祭を行っ





た。

供養祭には近江地区の島民二十余人が列席、墓前には花や果物を手向け、島の光満寺住職の読経のあと焼香し、二九一年前に大津島沖で難破した藩士らの霊に手を合わせた。

墓所は遺体が漂着、仮埋葬されたといわれる横島の目の前で、島民たちは遠い昔の出来事に、思いを馳せ死者を偲んだ。島民たちは昨春秋、倒れていた墓を元のように立て直し、草を刈り、二十五日の命日を前に初めて供養祭をしたものだが、再び草を刈って墓の周囲を清掃した。

昔から墓の所在だけは知っていた古老たちもどんな因縁の墓か一切分らなかつただけに、約三百年ぶりに明らかになつた七人墓に感慨も新ただつたろう。

近江自治会長で石材業の石田悟氏も「毎年供養を続けていきたい」と話されていた。

島原市長より次のような封書が届いた。

「貴台には益々ご清祥の事と存じます。さて、去る六月二十五日の読売新聞紙上で『徳山市の離島大津島近江地区において長崎、島原藩士、河野助之進他六人の七人墓供養祭が執り行われた』との記事を拝見致し、当島原市にゆかりのある藩士達の墓が貴地に在ることを知り、驚くと共に、皆様のご厚情に対し、深く感謝致している次第でございます。

思えば約三百年近くの永い間近江地区住民の方々の暖かいご厚情により、この七人墓が手厚く管理保存されてきたのみならず、このたびは貴台のご尽力により墓前供養までしていただき誠にありがとうございます。

泉下の霊もさぞかし安らかに成仏されたことと存じます。当島原においても、当時の記録はないものかと目下調査させておりますが、貴台のところは何らかの資料でもございましたらお知らせ願えないでしょうか。特に島原藩ご用船の徳山沖における遭難の年代（年月日）等お知らせいただければ、今後の調査の上で一応の目安ともなりますので何卒よろしくお願いたします。

尚、将来機会がございましたら島原からも是非墓参りにお伺いさせていただきます。

ここに貴台をはじめ近江地区住民の方々、並びにこの七人墓供養祭にご尽力下さいました関係の皆様に対し島原市長として心からなる謝意を表するとともに、皆様の今後のご発展とご健勝を祈念しましてお礼のご挨拶と致します。ありがとうございます。敬具」と、島原市長鐘ヶ江管一氏の礼状が届き、八月十五日盆時には一万円が現金送金され、地区島民へ供養に対しての志があるなど、急に島原市との関係が善意によって結ばれてきた。

島民の方々も昔から「板子一枚下は地獄」ということばがあるように、一度洋上に出てゆけば帰り来るまでは安心出来ないのが常であった。難破した人々に対しては誰人であっても手厚く葬るのが島の人々の民俗となってきた。

島の或る人は「仏壇と船にはいくら金をかけても惜しくない」と言っている。

死者の霊を手厚く弔うことは生を大事にすることに通ずるものであることを痛感させられた。

この島には、近くの瀬戸浜には寛延元年（一七四八）遭難した福岡県能古島の回船乗組員を葬った「十人墓」があり、昨年は歌碑も建てられ、福岡市・徳山市・新南陽市各市長など参列され供養をされたのも記憶に新しいところである。

この島が二か所も他所の難破船員の墓の関係で友好関係の美しい心のきずなで結ばれるようになるとは何という奇しき因縁であろう。

墓碑銘文

淡涼圓清信士

河野助之進一通者西肥島原城内産也姓源氏田嶋氏之子也城之□士河野久左衛門昌通只有一女无男以有外家之親養之妻其子為子令受嗣姓氏因奉事城主為近侍今茲癸酉六月□□勤役於^①武江在先行之刻十五日起役十八日豐小倉港上船廿二日汎周防洋廿五日遇^②颶母揚光吞吳奮怒洪波幹天輪湧浪轉地軸^③駛雨飛沙礫飄風拔大木海面幽暮若宵而不能辨西東檣折楫權遭^④羗羊觸藩之凶乃不知所為一通仍勸舟子欲漸^⑤干陸門閥財者於一処防之橫島者也臨□方欲下□□二年^⑥前乍卻末如之何一通忽勸同僚與六人決意把□□到干崖而未及起身豪濤斗拳拽□二人不得再起行年三十有一躬没海底与鯨鯢為伍骸漂泊者与藻^⑦纏相雜欲服□動之敏而早墜命也全非夫不吊之□矣訃至^⑧舉家悲慟嗚呼子安之禍子羽之恨識之与不識无

不^⑨酸鼻也実可哀哉便収葬於^⑦横島殯非五父之衢為□□□母女而后恐^⑩无人之識其処故建石以畧記其姓名謹書之銘云

銘 曰

之子无良 遇^⑪颶防洋 □□□□ 羊角折^⑧檣

採石月墜 鯨^⑫鯢傷 □□□□ 魂遊肥陽

元禄六年癸酉六月 吉捕軒撰

註

① 武江江戶

② 颶雨にわか雨

③ 藻纏海草(も)

④ 殯^⑬かりもがり

⑤ 殯^⑭かりもがり

⑥ 反葬のこと

⑦ 御城米城中の貯蓄米

江戶幕府が直轄地または譜代の諸藩に命じて 饑饉に備えるため貯蔵させた米穀。

(昭和五九年九月五日例会発表)